



ふるさとへの思い カタチにして、未来へ

お茶染めプロジェクトは商品のロゴを作るため、小中学生から「私の川根本町」を集めました。絵や文字で表現された95点の作品すべてには、町の未来を思う気持ちが詰まっています。

商品のロゴデザイン 小中学生が大役を担う

「川根本町といえばお茶と山と星空と：」「あと鹿とイノシシー」。中川根中学校の教室から子どもたちの元気な声が聞こえてきます。

お茶染めプロジェクトから、商品ロゴの基になるモチーフを考え、ほしいと依頼され、町内4つの小中学校の代表者で立ち上げた小中学生お茶染め実行委員会(以下、「実行委員会」)。作品の募集方法を考えたり、各校での協力を呼びかけたりしました。「僕たちでも、町の未来の力になれるんだ!」と子どもたちを中心に、ふるさとへの思いを形にする挑戦が始まりました。

9月3日、全6小中学校から応募があった95点の作品が中川根中学校に集められました。机に広がった個性あふれる作品に、誰ともなく「これ全部にみんなの思いが詰まっているんだ」と歓声が上がりました。

子どもたちは話し合いを重ね、川根本町らしさを特に表現した作品を選び出し、プロのデザイナーの元に届けました。

10月、完成したロゴが子どもたちに披露されました。実行委員の第一小学校6年生の長谷川新汰さんは「町の未来のためと考えると責任を感じた」と話します。そんな子どもたちの思いが、完成したロゴには余すところなく込められているのです。

教室の中では学べない 地域と触れ合う「経験」こそ財産に

「ロゴ」のモチーフを考えることは、子どもたちにとって初めての挑戦で本当に難しいことだったはず。まず「ロゴ」とは何から理解させる必要がありました。コロナ禍で地域との交流が制限されていた中、子どもたちが多くの人と触れ合える絶好の機会だと思い、お茶染めプロジェクトに協力しました。教室の中の限られた人間関係しか知らずに学ぶよりも、様々な世代の人たちと交流して得られる

知識や経験は新鮮な感動をもたらします。その感動の積み重ねが、子どもたちの個性を育み、今後急速に変化する社会を、生き抜く力を養うことにつながります。子どもたちはまだ、川根本町の実情を正確に理解してはいませんが、お茶染めプロジェクトに参加し、地域の人や魅力に触れた「経験」は、きっとかけがえのない財産になっていくはずです。



川根本町立中川根中学校
永野 利晴 校長



6_本川根小学校でお茶染めの商品を紹介 7_集まった「私の川根本町」。子どもたちの感性があふれる

実行委員会interview-

地域の人や小学生と一緒に一つのことに取り組んだことはすごく貴重な経験で楽しかったです。本川根中学校にお茶染めプロジェクトの思いを説明に行ったときには、自分の言葉で「川根本町の未来のため」を伝えることができました。

ロゴがきっかけで、町がすぐに有名になることは難しいですが、これから自分には何ができるかを考えることが大切だと思っています。(板谷 知卓さん)

始めはロゴ制作に対して想像ができなくて不安が大きかったです。でも、小学生の純粋な思いを聞きながら取り組むうちに、この町をもっと多くの人に知ってほしい、この町の未来に少しでも貢献できればと思うようになっていました。

ロゴが付いた商品がこれから色々な所で販売されていけば、川根本町は今よりも有名になっていくはずですよ。お茶染めプロジェクトに参加したことで、川根本町の未来のために地域の人たちと挑戦ができて本当に良かった!(相藤 真緒さん)



中川根中学校3年 板谷 知卓 さん(左・水川区) 相藤 真緒 さん(右・藤川区)



1_お茶染めを初めて体験する南部小学校児童 2_第一回実行委員会。鷲巣さんの思いに聞き入る 3_本川根小学校にロゴ制作の意義を説明する実行委員の第一小学校児童 4_プロのデザイナー(中央)に選んだロゴを紹介 5_最終候補の作品5点。

